

◎ 連合会・労協Gだより

10月、連合会・労協Gへの加盟を念頭に、異業種で法人格もいろいろな3つの事業体と経営問題での突込んだ話し合いと交流がもたれた。

パラマウント、無茶々園、S社（しばらくは名を伏せる）の3社。靴の生産・販売、無農薬蜜橘農家、在宅介護総合サービスと、これまでの事業団の事業種目には出てこない内容で、経営形態も株式会社、農事組合である。

そこでの経営分析、原価計算、資金繰り、税務対策などを集中して作業した。お互いに「サイフの中を見せ合って」ザック balan に語り合い、再生・飛躍の可能性を見出し、新たな活力を生んでいる。

無茶々園は、20年かけて堅実に力を蓄えていた。パラマウントとS社は、税理士の先生や関係者の評価もきびしく経営的には大きな改革を必要としていたが、労協運動のたくましい発展と、いま、

大きな関心と期待を広げている高齢協づくりの運動とリンクすることで3つの経営体がこれまでに切り開いてきた財産（負の財産をプラスに変えることも含めて）を生かす事業計画を協力してつくりたいということになった。

この作業にかかわって、改めて、自からの苦い経験を思いおこしながらつくづく思うのは、経営理念の実現にとって、赤字を出さず必要とする資金を着実に蓄積していくことの大切さである。

パラの経理をみている先生が「赤字を自分のこととして考えること。赤字を続けては企業は存続できなくなる」との話は、当り前のことなのだが、当り前のことをやりきる体質をつくるのがまずあって、労協Gの充実へとつながっていくのだということをも更めて確認した10月である。

中田 宗一郎（労協連合会・専務理事）

◎ センター事業団だより

第3回代表者会議が11月に行われる。95年度から始まる第2次中期計画（95年～99年）の提案がメインテーマである。正式には来年5月第10回総代会で決定されるが、不透明な時代だけに計画づくりは難しい。21世紀をどのような水準の労働者協同組合として迎えるのか。センター事業団の組合員の夢をのせた計画となる。全国の事業所・ブロックでは上半期の総括と下半期事業計画が議論されている。代表者会議までに今期の目標を鮮明にする。経営状況は今期も厳しい見通しである。平成不況といわれるが協同組合は不況の時こそその真価が問われる。全組合員経営を貫くことがセンター事業団の姿勢だ。厳しい議論も当然ある。質の高い総括・事業計画が求められている。中野共立病院が「病院ランキング」で10位にランクされたと「サンデー毎日」10月16日号で報道している。医師グループが首都圏373病院を清潔度を基準に

調査した結果だそうだ。勿論清掃の仕事はセンター事業団で行っている。組合員の喜びは大きい。

栗東事業所が10月20日で3周年を迎えた。主婦が中心の大型事業所である。130名の組合員が働いている。3年前に初めて労働者協同組合と出会った人々が、今では全国の事業所をリードする水準を示しつつある。東京都の指名参加願いの更新が10月から始まった。理事長を先頭に東京事業本部は大慌てである。2年に1度のことであるが、東京都をはじめ全部で東京都下の50余りの自治体へ申請するので中々大変な作業である。高齢者協同組合づくりにとって仕事は不可欠である。自治体の仕事は中でも特に重い位置にある。労働者協同組合を1業者としてしか扱わない自治体もあるが、実績作りには不可欠の作業と頑張っている。

坂林 哲雄（労協センター事業団・事務局長）